

小学校英語活動の経験と 中学生の英語学習に対する意識との関係

酒井英樹・福本優美子
(信州大学・Benesse 教育研究開発センター)

本研究の目的

本研究の目的は、公立小学校の英語活動の経験が中学校英語学習にどのような影響を及ぼすかを調べることを通して、小中の英語教育の円滑な接続への示唆を得ることである。学校の授業以外で英語の勉強をしていた者を分析から除き、学校での英語活動を経験した生徒に焦点をあてようとするものである。

調査と対象者

本研究は、「第1回中学校英語に関する基本調査 [生徒調査]」(Benesse 教育研究開発センター、2009年7月発表)で得られたデータを再分析したものである。この調査は、中学校の英語学習の実態と、英語や外国に対する意識をテーマにして、中学校2年生を対象にして、2009年1月～2月にかけて実施された。有効回答数は、2,967人(公立中学校33校)であった。

「あなたが小学生の時、学校で英語の授業や活動はありましたか」という質問と「あなたは中学校に入学する前(小学生の時やそれ以前)に、学校の授業以外で英語や英会話の勉強をしていましたか」という質問に対する回答をクロス集計し、学校の授業以外での勉強経験者を除き、学校だけで英語の授業を経験したことのある群(経験あり群、1,579人、33校)と、中学校入学以前に学校の授業でも授業以外でも英語学習を経験してこなかった群(経験なし群、174人、27校)に分けた。

分析対象の主な質問項目

本研究の分析対象の質問項目は、(1) 英語の授業の理解度、(2) 英語の得意・苦手、(3) 現在の英語の成績、(4) 英語学習のつまずき(11項目)、(5) 英語学習の動機づけ(12項目)、(6) 好きな英語の活動(4項目)であった。各項目は、次の通りである。

- (1) 英語の授業の理解度。「あなたは、学校の英語の授業をどれくらい理解していますか」という質問に対して、5 件法（1 ほとんどわかっている、2 70%くらいわかっている、3 半分くらいわかっている、4 30% くらいわかっている、5 ほとんどわかっていない）で回答を求めた。
- (2) 英語の得意・不得意。「あなたは英語が得意ですか。苦手ですか。」という質問に対して、4 件法（1 とても得意、2 やや得意、3 やや苦手、4 とても苦手）で回答を求めた。
- (3) 現在の英語の成績。「あなたの現在の英語の成績は、クラスの中のどれくらいですか」という質問に対して、5 件法（1 下の方、2 真ん中より下、3 真ん中くらい、4 真ん中より上、5 上の方）で回答を求めた。
- (4) 英語学習のつまずき。次の 11 項目について、4 件法（1 とてもあてはまる、2 まああてはまる、3 あまりあてはまらない、4 まったくあてはまらない）で回答を求めた。

1. 「単語を覚えるのが難しい」
2. 「文法が難しい」
3. 「英語の文を書くのが難しい」
4. 「英語の文を音読するのが難しい」
5. 「英語を話すのが難しい」
6. 「英語を聞き取るのが難しい」
7. 「外国、異文化に興味を持たない」
8. 「英語のテストで思うような点数がとれない」
9. 「英語そのものが嫌い」
10. 「英語に限らず自分からすすんで勉強する習慣がない」
11. 「英語に限らず、勉強する気持ちはない」

- (5) 英語学習の動機づけ。「あなたが英語を勉強しているのは、どうしてですか。勉強する理由についてあてはまる番号に○をつけてください。」という質問に対して、12 項目が示された。4 件法（1 とてもあてはまる、2 あてはまる、3 あまりあてはまらない、4 まったくあてはまらない）で回答を求めた。

1. 「英語が好きだから」
2. 「英語の勉強がおもしろいから」
3. 「中学生のうちには勉強しないといけないから」
4. 「英語の先生が好きだから」
5. 「英語の先生がはげましてくれるから」
6. 「英語ができると優秀だと思われるから」

7. 「英語のテストでいい点を取りたいから」
 8. 「できるだけ良い高校や大学に入りたいから」
 9. 「成績が悪いと親にしかられるから」
 10. 「外国を旅行するときに使いたいから」
 11. 「就職するときに役立つから」
 12. 「英語を勉強すると視野が広がるから」
- (6) 好きな英語の活動。「あなたは次のようなことは好きですか。あてはまる番号に○をつけてください。」という質問に対して、4項目が示された。4件法（1 とても好き、2 まあ好き、3 あまり好きでない、4 まったく好きでない）で回答を求めた。
1. 「英語で話すこと」
 2. 「英語を聞くこと」
 3. 「英語で書くこと」
 4. 「英語で文章や本を読むこと」

分析方法

順位尺度を間隔尺度とみなして、2群の平均に差があるかどうかを検討するために、 t 検定（30回）を実施した。第一種の過誤を避けるため、ボンフェローニ法により有意水準を .00167 に設定した。

結果

(1) 英語の授業の理解度。

経験あり群 ($n = 1,574$, $M = 2.975$, $SD = 1.130$) と経験なし群 ($n = 174$, $M = 3.362$, $SD = 1.168$) の間で、統計的に有意な差が見られた ($t(210.365) = -4.158$, $p = .00005$)。すなわち、経験あり群は、経験なし群よりも、授業を理解している度合いが高いことが示された。

(2) 英語の得意・苦手。

経験あり群 ($n = 1,575$, $M = 3.006$, $SD = 0.896$) と経験なし群 ($n = 172$, $M = 3.215$, $SD = 0.841$) の間で、統計的に有意な差が見られなかった ($t(1,745) = -2.926$, $p = .00348$)。

(3) 現在の英語の成績。

経験あり群 ($n = 1,560$, $M = 2.542$, $SD = 1.243$) と経験なし群 ($n = 170$, $M = 2.329$, $SD = 1.230$) の間で、統計的に有意な差が見られなかった ($t(1,728) =$

2.123, $p = .033860$ 。

(4) 英語のつまずき。

両群の間で統計的に有意な差が見られた項目はなかった。

(5) 英語学習の動機づけ。

経験あり群と経験なし群で、統計的に有意な差が見られた項目は次の3項目であった。

「英語が好きだから」という項目において、経験あり群 ($n = 1,569$, $M = 2.883$, $SD = 0.888$) と経験なし群 ($n = 170$, $M = 3.118$, $SD = 0.883$) の間で、統計的に有意な差が見られた ($t(1,737) = -3.278$, $p = .00106$)。すなわち、経験あり群は、経験なし群よりも、英語が好きだから英語を勉強しているという理由を強く持っていることが示された。

「英語のテストでいい点を取りたいから」という項目において、経験あり群 ($n = 1,567$, $M = 1.967$, $SD = 0.939$) と経験なし群 ($n = 171$, $M = 2.351$, $SD = 1.087$) の間で、統計的に有意な差が見られた ($t(198.629) = -4.435$, $p = .00002$)。すなわち、経験あり群は、経験なし群よりも、テストでよい点を取りたいために英語を学習しているという理由を強く持っていることが示された。

「英語を勉強すると視野が広がるから」という項目において、経験あり群 ($n = 1,567$, $M = 2.664$, $SD = 0.949$) と経験なし群 ($n = 170$, $M = 2.965$, $SD = 0.883$) の間で、統計的に有意な差が見られた ($t(213.620) = -4.190$, $p = .00004$)。すなわち、経験あり群は、経験なし群よりも、英語を勉強すると視野が広がるという思いを強く感じていることが示された。

(6) 英語の好きな活動。

4項目中、3項目において経験あり群と経験なし群の間で統計的に有意な差が見られた。まず、「英語で話すこと」という項目において、経験あり群 ($n = 1,569$, $M = 2.699$, $SD = 0.861$) と経験なし群 ($n = 170$, $M = 2.988$, $SD = 0.843$) の間で、統計的に有意な差が見られた ($t(209.103) = -4.240$, $p = .00003$)。

次に、「英語で聞くこと」という項目において、経験あり群 ($n = 1,567$, $M = 2.689$, $SD = 0.834$) と経験なし群 ($n = 168$, $M = 2.911$, $SD = 0.825$) の間で、統計的に有意な差が見られた ($t(1,733) = -3.274$, $p = .00108$)。

また、「英語で文章や本を読むこと」という項目において、経験あり群 ($n = 1,568$, $M = 2.906$, $SD = 0.857$) と経験なし群 ($n = 168$, $M = 3.262$, $SD = 0.703$) の間で、統計的に有意な差が見られた ($t(1,734) = -5.194$, $p = .0000002$)。

一方で、「英語で書くこと」という項目は、経験あり群 ($n = 1,568, M = 2.705, SD = 0.907$) と経験なし群 ($n = 169, M = 2.893, SD = 0.873$) の間で、統計的に有意な差が見られなかった ($t(1,735) = -2.581, p = .00995$)。

すなわち、経験あり群は、経験なし群よりも、話すこと、聞くこと、読むことの活動を好むことが示された。一方で、書くことにおいては、両群に差は見られなかった。

考察

まとめると、小学校における英語活動の経験は、(1) 情意面（授業の理解度、英語の学習動機、好きな活動）に肯定的な影響を及ぼしていること、(2) 学習に直接関わること（英語の得意・不得意、英語の成績、つまずきの要因）には顕著な影響を及ぼしていないことが示された。

学校における英語活動の経験は、現在の授業の理解度に大きく良い影響を及ぼしていた。英語の好きな活動に関する結果によれば、経験あり群は、経験なし群よりも、英語を聞いたり、話したり、読んだりすることに抵抗感がないことが示されている。このことから、「聞いたり、話したりすることに対する低い抵抗感」が、聞くこと・話すことに焦点が置かれた「授業への積極的な取り組み」へとつながり、その結果、「授業の理解度の高さ」という効果を生むのではないかと推測される。

現在の授業の理解度が高かった要因として、動機づけの点も挙げることができる。英語学習の動機づけに関する結果によれば、経験あり群は、経験なし群よりも、英語が好きであるという内発的動機づけが高く、英語を勉強すると視野が広がるという価値を強く持つと同時に、英語のテストでいい点をとりたいという具体的な目標を強く抱いていることが示されている。このことから、「高い動機づけ」が、「英語の学習行為」につながり、「授業の理解度の高さ」につながるとも考えられる。

学校における英語活動の経験は、英語学習に関わること（成績やつまずきの要因）においては顕著な影響を及ぼしていないことが示唆された。後述するように、統計的に有意な差が見られなかったからといって、経験あり群と経験なし群を同等であると考えることには注意を要する。しかし、小学校における英語活動が、国際理解教育の一環として行われており、体験が重視され、英語力の向上を直接の目的としていないことを考えると、経験の有無が成績に影響を及ぼしていないことは予測可能な結果であると考えられる。

本研究では、学校の授業以外で英語や英会話の勉強している経験者を除いて分析した。すなわち、小学生の時に、学校だけで英語に触れてきた生徒と、学

校でも学校以外でも英語を学ばなかった生徒を比較した点に特徴がある。一方で、本研究の限界点も指摘できる。第一に、経験あり群 ($n = 1,579$) と経験なし群 ($n = 174$) の人数に大きな違いがあることである。本研究の経験なし群の結果を、小学校時に学校でも学校以外でも英語を学んでいない児童・生徒の特徴として一般化することには注意が必要であると思われる。2009年1~2月の調査の時点で、公立小学校において英語活動の実施が年々増えてきたことを反映し、学校でも学校以外でも英語を学んでこなかった生徒の人数が少なくなっている。今後、外国語活動が必修化されると原則的にこのような生徒はいなくなる。人数は少なく、一般化には注意を要するが、本研究の経験なし群の結果は貴重なデータであると思われる。第二に、第一種の過誤を避けるため、有意水準を調整したことである。今回、30回の t 検定を実施した。そのため、有意水準を厳しく調整した。一方で、第二種の過誤（実際には差があるのに、差がないと判断してしまう過誤）の危険性を否定できない。したがって、本研究において、有意差が見られなかった項目について、経験あり群と経験なし群が同等であると判断してはいけなないと考えられる。